

フランス哲学についての感想

— 副題 —

西田 幾多郎
京都大学

* 見本提示のため、原文テキストに改変を加えています。

Impressions on French Philosophy: Subtitle

Nishida Kitarō
Kyoto University

In considering French philosophy, I am consistently impressed by its distinctive character, which stands in marked contrast to both German and British traditions. French thought manifests a unique mode of perception and reasoning, reflecting a singular intellectual temperament that resists assimilation into other established philosophical frameworks. Its clarity of expression and individuality of approach position it as an indispensable strand within the broader history of philosophy. The present remarks, necessarily concise, represent only a preliminary engagement with the subject. Owing to present constraints, I am unable to undertake a more sustained analysis; nevertheless, I wish to emphasize the originality of the French tradition, whose contributions warrant careful study in their own right. My attention to French philosophy is not intended merely to catalogue stylistic or methodological differences. Rather, it is to recognize in it a distinct orientation toward truth and inquiry. This orientation, I contend, provides valuable resources for comparative philosophical study and contributes to my broader intellectual project of integrating the insights of both Western and Eastern philosophical traditions.

キーワード：合理主義、直感、サンス、習慣、芸術

keywords：rationalism, intuition, sens (仏), habit, art

1

私はフランス哲学にはドイツ哲学やイギリス哲学と異なった独得な物の見方考え方があると思う。しかし私は今それについて詳しく考え、詳しく書く暇を有たない。ただこれまで人に話したり、或は機に触れて書いたりしたことを、思い出るままに記すだけである。デカルトといえ、合理主義的哲学の元祖である。しかし彼の『省察録(Meditationes)』などを読んでも、すぐ気附くことは、その考え方の直感的なことである。単に概念的論理的でない。直感的に訴えるものがあるのである。パスカルの語を借りていえば、単に«l'esprit de géométrie(幾何学の精神)»でなくて、«l'esprit de finesse(繊細の精神)»というものがあると思う。フランス哲学の特色は後者にある。同じデカルトの流を汲んだ人でも、マールブランシュとスピノザとを比べて見れば、思^{おも}半^{なかば}に過ぐるものがあるであろう。

2

元来芸術的と考えられるフランス人は感覚的なものによって思索するということができる。感覚的なものの内に深い思想を見るのである。フランス語の「サンス(sens)」という語は他の国語に訳し難い意味を有っている。それは「センス(sense)」でもない、「ジン」Sinn でもない。マールブランシュはいうまでもなく、デカルトにすらそれがあると思われる。しかし私はフランス哲学独得な内感的哲学の基礎はパスカルによって置かれたかに思う。その「心によっての知(connaissance par coeur)」は「サン・アンチーム」sens intime(内奥感、内密感、内親感)としてメーヌ・ドゥ・ビランの哲学を構成し、遂にベルグソンの純粹持続にまで到ったと考えることができる。メーヌ・ドゥ・ビランはパスカルが賞讃するといった«ceux qui cherchent engémissant(うめきながら探求する者)»というような哲学者であった。

「センス」でもない「ジン」でもない「サンス」は、一面において内面的と考えられると共に、一面に社会的、常識的とも考えることができる。概念に制約せられない直感である。それは自己自身を表現する実在、歴史の実在に対する「サンス」である。そういう意味においては、かかる立場から世界を見るのはモンテーニュが先驅をなしたということができるであろう。彼は実に非哲学的な哲学者である。日常的題目を日常的に論じた彼の『エッセー』の中には、時に大げさな体系的哲学以上の真理を含んでいる。歴史の実在の世界は日常的世界である（そこが哲学のアルファでもオメガでもあ

る)。彼の描いた自己は日常的世界において生きぬいた自己である。しかしそこからはすぐパスカルの『パンセ』の世界にも行ける。彼は偉大な凡人である。モンテーンはフランス人にこういう物の見方考え方を教えたともいえるであろう。そこからラ・ブリュイエールやヴォーヴナルグなどのいわゆるモラリストへ行くこともできるが、途はメーン・ドゥ・ビランやベルグソンの哲学へも通ずるのである。

京都へ来た初頃には、私は大にベルグソンに共鳴していた。私が始めてベルグソンを知ったのは、まだ四高にいた頃であった。その頃はベルグソンという名は、まだ世の中に知られていない頃であって、私もその如何なる人かを知らなかった。ただその頃私は純粹経験という考を中心として考えていたので、『意識に直接与えられているものについての試論(*Sur les données immédiates de la conscience*)』(岩波文庫版書名は『時間と自由』)、という書名に誘われたのである。しかし最初にベルグソンの精神を掴んだのは、独訳の『形而上学入門(*Einführung in die Metaphysik*)』であった。またどういう機会からであったか、今は思い出せないが、私は早くからメーン・ドゥ・ビランに非常に興味を有っていた。しかし彼自身の著書を手に入れることは、困難であった。京都大学へ来てから、学校へ、ナヴィルの出版した『メヌ・ド・ビラン未刊行著作集(*Oeuvres inédites de Maine de Biran*)』を購入することができたので、晩年の『心理学の基礎(*Fondements de la psychologie*)』や『人間学新論(*Anthropologie*)』などを読むことができた。今でも私は時に「J'agis, je veux, donc je suis(我行為す、我意志す、故に我あり)」などという語を引用することがある。しかしクーザンの出版したものは、遂に手に入れることができなかった。従って受働的習慣と能働的習慣との区別を論じた有名な最初の論文などは、近頃ティスセランの出版の全集が出るまでは読むことができなかった。能働的習慣と受働的習慣との区別の如きは面白い洞察と思う。コンディヤックの感覚論から出でて、その立場を守りながらかって主意主義的な理想主義的な立場に行ったのである。私はこういう所に、サン・アンチームの哲学独得の、ドイツやイギリスの哲学と異なったものがあると思うのである。習慣という如きことは、普通は、哲学的に重要な役目を有つとは考えられないのであるが、ラヴェッソンなどの哲学においては、習慣というものが世界観の根本的な役目をしている。ラヴェッソンはシェリングの影響を受けたというが、シェリングの同一が、メーン・ドゥ・ビランの影響によって、ラヴェッソンにおいて習慣となったと考えられるのは面白い。如何に同様な考え方がドイツとフランスとによって異なるかが分る。ロックの経験論の影響を受けたコンディヤックの流からメーン・ドゥ・ビランなどが出たのも同様である。無論、コンディヤックの感覚というのが、既にロックなどの感覚というものと同一のものでなかったかも知れない。

3

フランス哲学で合理主義といっても、単に概念的でない。デカルトが«clare et distincte (明晰判明)»という所に、既に視覚的なものがある。優れたフランスの思想家の書いたものには、ショペンハウエルが深くて明徹なスイスの湖水に喩たとえたようなものが感ぜられる。私はアンリ・ポアンカレのものなどにそういうものを感じるのである。 我国では明治の初年は如何にあったか知らないが、大体二十年頃以前は英国哲学の影響を受け、二十年頃以後はドイツ哲学の影響を受けて、今日に至ったといい得るであろう。私はドイツ哲学の優秀を疑うものではないが、右にいったように、フランス哲学にはフランス哲学に独得なものがあり、それはドイツ哲学やイギリス哲学にはないものであると思う。概念的体系に捕われて案外に内容の貧弱なものよりも、かえって直覚的な物の見方考え方において優れた所があるかと思う。私は考えるに、ギリシャ哲学には深い思索的な概念的な所と、美しい芸術的な、直感的な所があった。前者はドイツ人がこれを伝え、後者はフランス人がこれを伝えたといい得るではなかろうか。

引用・参考文献一覧

秋富克哉「作るということ——創造的純粹経験からの展開」『理想』第 681 号、2004 年、1～10 頁。

西田幾多郎『善の研究』、『西田幾多郎全集』、第 1 巻、岩波書店、2003 年。

- 略号を使用して引用例を短縮する場合は、略号について説明する凡例を添える (例: 本文では、1: 1 と表記する)。

Heidegger, Martin. *Grundprobleme der Phänomenologie, Gesamtausgabe*, Bd.58, Frankfurt. a. M. 2010.

Kopf, Gereon. “The Self-Identity of the Absolute Contradictory What?: Reflections on How to Teach the Philosophy of Nishida Kitarō.” *Teaching Texts and Contexts: The Art of Infusing Asian Philosophies and Religions*. Eds.: David Jones, Ellen Klein. Albany: SUNY Press, 2010. pp.129-148.